



シルクロードに生きた人びとの歴史ものがたり

末森 薫
民博 人類基礎理論研究部

小説『敦煌』の映画化
一九八八年、井上靖が小説を書き上げてから三〇年を経て、映画「敦煌」は公開された。日中共同製作の歴史大作であり、最優秀作品賞をはじめ、日本アカデミー賞の複数の部門で受賞した。一九七四年に製作発表がおこなわれたが、馬の不足や原作の内容をめぐる対立などから準備に時間を要し、監督やキャストも交替して撮影が開始された。

小説『敦煌』には、井上靖の歴史への深い造詣と、西域やシルクロードへの情熱が込められている。歴史小説の類ではあるが、時代考証がなされた歴史書としての側面ももち合わせ、史実に基づいた登場人物や歴史上の出来事の描写が、物語の基礎を貫いている。映画では、時系列が前後したり、登場人物の地位や性格が異なっていたりするなど、脚色を加えられた部分も少なからずあるが、その映像には、シルクロードに生きた人びとの営みを知るさまざまなヒントが含まれている。

沙漠の美と儂さ

映画「敦煌」は、沙漠の美しさと儂さを映し出す場面ではじまる。太陽の光を受けた砂丘の陰影は美しく、西域への情緒を掻き立てる。一方で、沙漠に落ちた花が朽ちていく映像は、沙漠の無常さを伝える。佐藤浩

でいく映像からは、沙漠で生きることの厳しさをあらためて覚える。

混沌とした民族模様

「敦煌」の舞台は、一一世紀のはじめ、大唐帝国が崩壊し、北宋が中国を治めていた時分である。北宋は、河西回廊一帯の領有をめぐるチベット系民族の吐蕃、トルコ系民族の回鶻（ウイグル）、そして物語の中心となる新興の西夏と争っていた。西夏はチベット系民族のタングートが建てた国であり、モンゴル帝国に滅ぼされるまで河西回廊一帯を治めた。

古代史における争いとは、領土をめぐる民族間の対立に置き換えられることもめずらしくない。しかし、状況はより複雑であり、単に民族間の争いに帰したわけではないようである。西田敏行扮する朱王礼は、「西夏軍には、吐蕃もウイグルの部隊もいる。俺たちは西夏軍の漢人部隊だ。この沙漠では、西夏もウイグルもない。生きるためには戦うしかない」と言う。古代シルクロードの争いにおいて、傭兵部隊が活躍したことは、歴史書の記録にも垣間見ることが出来る。東西交流の通路となった河西回廊一帯では、物資とともにさまざまな民族や文化が入り混じり、多民族が共生する社会がつくられていたのである。



撮影現場が残る莫高窟の崖面(2016年)

市扮する主人公・趙行徳は、沙漠において戦への準備をおこなっている際に、「負傷したもので、歩けるもの、馬に乗れるものは騎乗隊に同行させろ。歩けないもの、馬に乗れない重傷者は始末しろ」という命令を耳にする。負傷した仲間がいた行徳は激しく反発したが、結局は自らの手で仲間を殺めることになった。



沙漠をゆくラクダの隊列(2007年)

仏の世界を知るヒント

小説にはなく、映画にのみ登場するものに、石窟寺院を造営する場面がある。石窟寺院は、崖を削って掘り出した洞窟のなかに、仏像や仏画を配する宗教空間である。映画では、洞窟を掘った後に、壁面に仏画を描く場面が登場する。暗い洞窟のなか、足場が組まれた高い場所で絵を描く絵師は、灯明の光を頼りに仏画を描いていた。現在、わたしたちは電気の強い光を当てて、石窟内の仏像や仏画を鑑賞している。しかし、電気がない時代、人びとは、入口から差し込むわずかな太陽の光と、ろうそくや松明の揺らぐ光を頼りに、仏の世界をつくり出してはいたはずである。映画「敦煌」は、石窟という空間がどのようなものであったかを改めて考えるきっかけを与えてくれた。

敦煌市の郊外にある莫高窟の崖面には、映画のためにつくられた洞窟が今でも残されている。映画の公開から三〇年の時を経て、その洞窟も莫高窟の歴史の一部として刻まれた。莫高窟に残された数々の仏たちを参観する傍ら、映画「敦煌」の世界に思いをはせるのも一興であろう。



古代シルクロードの関所、陽関(ようかん)遺跡(2016年)

「敦煌」

1988年/日本・中国/日本語/143分/DVDあり

監督：佐藤純彌

出演：西田敏行、佐藤浩市、柄本明ほか